

藤木正一氏旧蔵中国石造彫刻について

— 中国彫刻をめぐるささやかな近代史 —



図1



図2



図3

「壁には岸田劉生の麗子像、安井曾太郎の風景画、宗達の蓮花図の額が掛かり、棚の推古仏の前には遼緑釉の香炉、根来の供物皿があり（中略）驚くことには漢の耳杯や李朝白磁の逸品が灰皿として出ている。」

藤木正一（1891-1967）は、山本鑑之進工務店を経て大阪で藤木工務店を創業し、銀行から住宅まで様々な建築施工に携わる一方、関西有数の美術コレクターとして知られた人物である。冒頭の一文は、晩年の藤木を自邸に訪問した邑木千以による邸内応接間の描写で、美術品に囲まれたその暮らしが垣間見られる〔註1〕。藤木の所蔵する陶磁器は開館間もない当館の展覧会に出品されているが、仏教美術にも造詣が深く中国石造彫刻も多数入手していたようである。豪華な大型本『支那上代彫刻』により、藤木が収蔵したその一部をうかがい知ることができる。

『支那上代彫刻』については以前もこの欄で紹介したが、同書は彫刻家の石川確治と住友合資会社工作部（日建設の前身）の建築家で東洋古美術コレクターの笹川慎一が編集を担当し、美術写真を専門とする坂本万七が撮影、柳宗悦による雑誌『工藝』の版元である聚楽社から1930年に250部が刊行された大判図版集で、作品解説などは付されていない。第一輯から第三輯まで発行され全32点の中国石造彫刻が掲載されるが、その所蔵者をみると関西は武藤山治、橋本関雪、山口謙四郎、笹川慎一、藤木正一ら、東京は細川護立や根津嘉一郎など錚々たる顔ぶれであり、コレクターによるコレクターのための写真集といった感すらある。なお、その後同書は聚楽社が三冊分を一冊に編集し直し1932年に再版されている。

同書に掲載される藤木所蔵の作品は6点あり、そのいくつかを図版と共に紹介したい。

□ 北魏・延興2年（472）如来三尊像（図1）

丸顔にふっくらとした腕が印象的な如来坐像を主尊とし、背面には釈迦の誕生・灌水の場面が浮彫されるなど、北魏前期の優品である。現在は奈良・大和文華館所蔵。

□ 北魏・正光2年（521）三尊像龕（図2）

地方性色濃い独特な衣文表現を特徴とする像で、おそらくは陝西・西安近郊で制作されたと考えられる。現在はワシントン・

フリアギャラリー所蔵。

□ 隋・開皇8年（588）鳳凰像（図3）

山西・天龍山石窟第8窟の窟内にある仏龕の縁取り装飾の一部としてつくられた鳳凰像を将来したもの。小野家を経て当館の所蔵となった。

このほかにも安宅産業を経て大阪市立東洋陶磁美術館の所蔵となった河北・響堂山石窟将来像などがあり、充実した作品群である。

さて、藤木と『支那上代彫刻』を編集した笹川慎一（1889-1937）は20年にわたる仕事上のパートナーであり、西洋絵画コレクターとして知られた岸本吉左衛門の本邸（1931年竣工、登録有形文化財・岸本瓦町邸、大阪市中央区）も、笹川が設計し藤木工務店が施工を担っている〔註2〕。さらに笹川の追悼文集に藤木が寄稿しているように、古美術の収集についても語り合う関係にあったようだ〔註3〕。なお笹川の収蔵品については没後の売立てに際して刊行された『笹川慎一コレクション』（1939年）によりその全貌を知ることができ、そのうち1点は上本家より当館へ寄贈されている。

中国石造彫刻を収集の中心に据えた山口謙四郎はもちろんのこと、総じて関西一円の著名なコレクターは、藤木をはじめとして数の多少はあれ中国石造彫刻の優品を所蔵していたようである。つまり昭和初期の関西には、現在は国内のみならず世界に散らばる様々な中国石造彫刻が集積していた状況にあったといえる。藤木正一が収集した作品群については不明な点が多いが、今後も大正～昭和初期の関西における中国石造彫刻コレクションの形成について情報を集めていきたい。

（敬称略）

註

- 1 邑木千以『愛蔵弁あり』浪速社、1965年、32頁。
- 2 山形政昭『建築家笹川慎一をめぐる』『大阪芸術大学紀要〈藝術〉』15巻、1992年。
- 3 長原玄編集『笹川慎一追憶集』笹川昭雄、1940年。

（齋藤龍一）